



2012年(平成24年)

2月号(No. 801)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

肉体労働ではない山登りを

大森久雄

「山の本が読まれなくなり、売れなくなった」と言われて久しい。山岳会の図書室の利用者も少ないようだ。果たしてほんとうに山の本が読まれなくなったのか。長年、図書委員を務め、会報の編集長も歴任されている大森久雄氏に現状を分析してもらった。

夕食の前、電話が鳴った。かけてきたのはこの『山』編集担当の神長さん。内容は、たとえてみれば110番か119番で、至急原稿を頼む、ということだった。山の本に関する事で、聞いてみるとかなり厄介。締切りまで時間もないし、その場でOKとは言いかねた。

本会には図書室があるが利用者は少ない、また最近山の本の販売成績もあまりよくない、図書

は会にとって大きな財産だし、山の文化の継承に欠かせないものだ、山の本が衰退しているのではないのか、それは登山文化の消失につながるのではないか、この状況を打開するにはどうすればいいか。用件のおもむきはこのようなことであった。これは大問題。突如降りかかったこの難問に脳髓の働きを活発にするため、夕食時のアルコールの量がふえてしまった。

*

目次

肉体労働ではない山登りを……	1
ボナッティ、半生の闘い——K2での真実……	4
JACとなじみの深い、	
加藤保男の軌跡をたどる企画展……	6
メスナーのプロジェクト最後の山岳博物館(下)……	7
東ヨーロッパ講演旅行2011……	8
東西南北……	9
アマ・ダブラムの月	
海外の主な山岳会	
支部だより……	11
秋田支部	
活動報告……	12
図書委員会／集会委員会	
図書紹介……	14
会務報告……	16
ルーム日誌……	17
会員異動……	17
新入会員……	18
図書受入報告……	18
INFORMATION……	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

ところで、日本山岳会が自前のクラブルームを持ったのは昭和4(1929)年で、そのころのこととは『山岳』第80年・1985年に島田巽さんが書いていたが、当時の名称は事務室ではなく集会室・図書室だった。つまり、ライブラリー機能が重んじられていたわけで、本会にとって図書・図書室というのは伝統的にそういう重みを持つていたものである。図書室の蔵書内容や機能についてはすでに『山』742号で横山厚夫さんが書いていて、そこでの提言は、それから5年たつたいまどうなったのか。それに触れていると問題が広がりがすぎてしまうが、図書の持つ意味が軽くなってきたというのではないか、というのが編集子の危惧であるようだ。それには同感。

そこで、さて、ではなにがどうなのか。That is the question.

*

本を読んでもらうにはどうすればいいのか。山に限らず図書の世界では永遠の課題だが、馬を水辺に連れてゆくことはできても水を飲ませることはできない、といわれる。それと同じで、図書の案内・解説をしても、土台、本に興味を持たず、本のない人生、本のない山登りでならん痛痒を感じない、という方にはこういう原稿はそもそも意味をなさない。新聞の読書欄つてだれが読むの、と発言したひとさえるのだから。

ということで、設問は厄介で書きにくい。よろめいたりつまずいたりになるかもしれない。

*

いま新潮社から発売中の季刊誌『考える人』の2012年冬号は特集「ひとと山に向かう」。一般誌が山や探検を特集することは少ない。記憶にあるのでは平凡社の『別冊太陽』103・1998年秋号「人はなぜ山に登るのか」、同じく『別冊太陽』125・2003年「日本の探検家たち」だが、今回の『考える人』の特集も読み応えがある。そのなかに池内紀×湯川豊の対談「山の愉しみ、山の文学を語る」があつて、山の雑誌が扱うのとは視点が違っているから興味をひかれる。

たとえば、小島鳥水の『日本アルプス』は苦行のようで読む気がしないとか、小島鳥水や大島亮吉の文章はたいしたことない、山岳文学全集を読むととても文学とはいえないというものが多いとか、雑誌『アルプ』は万年青年的な独特の臭みがあり、へんに抒情的でへんに哲学的とか、顔をしかめるひとがいるだろうが、大きくうなづく向きもあるだろう。

ここでわかるようにすべての文章と同じく山の場合も、読む側がどの立場にいるかによつて受け取り方が違ってくるわけだが、そ

ういう違いを乗り越えて、山に登る以上、やはり読んでおいたほうがいいという文章がある。それは文学であるかないかは別のことである。

自分の本(『山の旅 本の旅 登る喜び、読む愉しみ』平凡社)に書いたことのくり返しなので恐縮だが、山は本を読まなければ登れないわけではない。だから本を読まなくても、ただ登るだけならば困ることはない。しかし、本を読んで登ると読まずに登るのとでは、その山登りの内容が違ってくる、充実の度合いに差が出てくる。ここで当然、どう違うのですか、という質問が出るのだろうが、ためしに、たとえばだれでも知っている深田久弥『日本百名山』で、自分が登った山・登ろうとする山を読んでみれば、その山への対し方がはつきりと変わる経験をするだろう。数多い山の紀行文もまた同じことである。

*

1950年代から1960年代、山の本がかなり読まれていた時代があつた。たとえばガストン・レビュファの『星と嵐』。白水社版は大きな反響で、日本の岩壁登



名作が多い平凡社ライブラリー

攀の流れを変える影響があつた。

その後に新潮文庫になったが、10万部を超える勢いだつた(現在はヤマケイ文庫で読める)。そのほかヘルマン・ブルーやワルター・ボナッティの本も日本の山の世界に大きな影響を与えた。あの頃、ヨーロッパのアルピニストは光り輝いていた。いまそういう熱気はないだろう。ヒマラヤの場合でも同じ。当時、遠く仰ぎ見ていたアルプスもヒマラヤも、手の届くところになった。それに応じて本から得る反応が薄くなった。

1910年代、スイスを巡った辻村伊助は『スウィス日記』(平凡社ライブラリー)を著した。い

ま日常的といえるほどにアルプス周遊をする膨大な数の日本人旅行者のなかから、『スウィス日記』の持つ熱気に匹敵するものを探するのはむずかしい。この事象から理解できているのは、独立峰であつた辻村伊助の100年後、あるいは『星と嵐』の50年後、アルプスの旅も山登りもすっかり一般化されて、当時と比較すれば全般にレベルはあがつたが、そのかわり平俗化も生まれた。そして一般化・平俗化の陰で失われたものがある。それが「熱気」であり、それはアルプスやヒマラヤだけの場合ではなくて、国内の山でも同じ現象が生まれた。こうした山登りの質的な変化、それが本の世界に影響しているということになるのではないだろうか。

*

しかしその一方、強く明るい潮流も生まれている。かつて遙かかなただったアルプスやヒマラヤで世界的水準の山登りを展開する若いひとたちが出てきている。そのひとり山野井泰史の『垂直の記憶』(ヤマケイ文庫)には、100年前とはあきらかに違う自信と自負が生まれている。

先述の『考える人』でインタビュウを受ける角幡唯介の著作『空白の五マイル』（集英社）が持つ「熱気」には、新しい世界の展開を見ることが出来る。文芸誌『ユリイカ』（青土社）1月臨時増刊特集号の「石川直樹」もまた同じ。

いまあげた人たちのすばらしいのは、行動・実践と同時にすぐれた感性と表現能力でそれを記録していることである。そこには退潮する本、というマイナスの雰囲気はない。

石川直樹が北極からのきびしく長い旅を終えて最終目的の南極点に立ったとき、その記録『この地球を受け継ぐ者へ 地球縦断プロジェクト「P2P」全記録』（講談社＋α文庫）の最後の一行は、終わった、のではなく「新しい旅がいまはじまったのだ。」

最終目的地に立って「新しい旅がはじまる」と言い切れるその熱気、その思想。それはモーリス・エルゾグのあの最後の一行「人間の間生活には、他のアンナプルナがある」よりも爽やかで、それこそが新しい。そしてこうした世代の全地球相手の行動と思索を見てみると、すぐれた先人の登攀記・

探検記もまたそうなのだが、わたしはサン・テグジュペリ『人間の土地』冒頭の言葉を思い出す。

〈ぼくら人間について、大地が、万巻の書より多くを教える。理由は、大地が人間に抵抗するがためだ〉（堀口大樹訳・新潮文庫）。

＊

山登りはそこに精神の働き・裏付けがなければ、ただの肉体労働である。山登りを単なる肉体労働に終わらせないもの、それが書く（あるいは絵でも写真でも表現することであり読む（見る）ことである。それがなければ人間らしい世界とは無縁である。『人間の土地』の最後の一行がそれを言い



刊行1周年を迎えたヤマケイ文庫

表している。
「精神の風が、粘土の上を吹いてこそ、はじめて人間は創られる。」

＊

数多いヒマラヤもののなかにも、すでにもう50年以上も前にそうした精神世界に焦点をあてた著作があった。

『考える人』の対談で山の文学ベスト10のリストにあげられているウィルフリッド・ノイス『エヴェレスト その人間的記録』（浦松佐美太郎訳・1956年・文藝春秋新社）がそれ。この本が選ばれているのには拍手。イギリス隊エヴェレスト初登頂のときの話だからいま読むとだれもが知っている状況が出てきて面倒、という部分はあるが、山の名前を取換えてもそのまま通用してしまうような報告があるなかで、「頂上だけにしか興味のない人には読んでもらうわけにはいかない」という姿勢で団体の登攀活動のなかで埋もれてしまう「個人」のこころの状況が描かれている。どこかで復刊してほしいものだ。（余談だが、この『考える人』『ユリイカ』両誌の特集は面白かった。映画『カサブランカ』の名字幕（君の瞳に乾杯）

をもじっていえば、この特集企画を実現させた編集者に乾杯。）

＊

さて、よろめきながらも、山の本の持つ世界へ会員諸兄姉をいざなうことができただろうか。ありがたいことに、いまは気安く手にとれる形式で山の本がたくさん出ている。平凡社ライブラリー、ヤマケイ、中公、岩波ほかの文庫。さらに、いまだんな山の本が出ているのか、という関心に応えらるデータは、本会図書委員会によって『山岳』に毎回その年に日本で刊行された「山岳図書目録」が掲載されている。なにげなく見ている分にはわからないだろうが、この種のデータは出版界でこの資料しかない。そういう地味で面倒で貴重な仕事の成果が『山岳』に掲載されているし、『山』には毎月図書の紹介がある。そこから自分の山の世界を豊かにする宝を見つけて、山登りをいっそうたのしくしていただければ、この寄稿も掲載の甲斐があるというものだ。



トピックス

ボナッティ、半生の闘い——K2での真実

谷 泰

2011年9月13日、あの謙虚一徹なワルター・ボナッティは81歳で他界した。ボナッティといえは、その35歳までに達成したいくつもの困難な登攀によって、世界の登山史上に消えることのない足跡を残した登山家であったことは、よく知られている。ただ、彼がK2登頂時に経験した出来事をめぐっての生涯にわたる真実への闘いは、日本でほとんど知られていない。

ちなみに当時の公表では、アルデイト・デジオに率いられたイタリア隊のコンパニョーニとラチェデッリは、1954年7月31日の夕刻6時少し前、世界第二の高峰K2（8616^{メー}）の初登頂に成功している。しかも、彼らは酸素ボンベの助けなしに頂上に達したとされ、それは初登頂という偉業にさらなる価値を付加した。ただその登頂事実は確かでも、酸素ボンベなしの登頂という公表には、ボナッティに疑問が残った。しかも、その登頂前夜30日、若き

24歳のボナッティは、生涯忘れ得ない苦い思いをさせられたのだった。ボナッティの真実への闘いはこれらのことに発しており、いま彼の証言の書『K2 La Verita', 1996』をもとに、当時起こった出来事を日を追って紹介させてもらうことにする。

決死のビバーク

7月29日、コンパニョーニとラチェデッリは、前日、レイ、アブラモ、ガロットティのサポートで、7627^{メー}の地点にC8を設営していた。ただそこが予定より低いため、C9の設営が必須となり、この日2人は、そのためC8を出発する。他方、前夜にC7に戻ったほかの3人は、ボナッティと、酸素ボンベをふくむ必要な物資をもつて、C8へのボッカを開始する。ところがまもなくアブラモとレイが不調を訴え、荷を投げだす。残るボナッティとガロットティだけで4人分の荷は運べない。やむなく2人は酸素ボンベをそこに残す

ことにした。そして午後、C8に到着した2人は、消耗したコンパニョーニとラチェデッリから、C8上方の氷壁の切り切りに多大な時間を費やし、この日C9設営ができなかったことを知らされる。

このことは、翌日をC9設営に費やすことの必須を意味した。そのうえ、31日のアタック成功を確実にするのに、下に残した酸素ボンベ回収は不可欠だ。こうして、翌日、調子のよいラチェデッリともう1人がC9の設営に向かう。他方、ほかの2人は、C8からいったんC7に下り、放置された酸素ボンベを回収、ほかのメンバーとともにC9に登る。こうして次の日のアタックに備えるという案が生まれる。

それにしても、調子のよいラチェデッリはさておき、C9設営に向かうもう1人をだれにするか。こうした課題が暗に浮上したのは言うまでもない。コンパニョーニの消耗は激しい。可能性として強力なボナッティが考えられたが、若い彼は、あえて自分からはそれを言い出せない。おまけに消耗激しいコンパニョーニを下らせ、とんでもないボッカをさせた

として、彼が酸素ボンベを荷揚げしなければ、成功は遠のく。このときコンパニョーニから、自分は翌日のC9の設営に加わるが、その後なお不調なら、その時もう1人のアタック隊員としてボナッティに交代してもらおうと提案された。

7月30日朝、C9設営に出かけるラチェデッリとコンパニョーニ、そしてC7まで下り、資材をもつてC9にボッカすることになるボナッティとガロットティは、夕刻にはC9設定予定地、見定めてあった岩塊の上で落ち合うことを約束して別れた。

こうしてボナッティら2人は下降、C7付近、前日ボンベを放置した箇所、下から来たアブラモ、ハイ・ポーターのマハディ、イサカーンと合流する。そして酸素ボンベを回収、踵を返し登攀を始めたが、C8付近でガロットティとイサカーンが脱落した。

残るは3人。15時半、あと3〜4時間の明かりが頼りだ。3〜4歩ごとに立ち止まることを繰り返す。16時半、C9予定地の下に到達、そのあたりにいるはずのコンパニョーニとラチェデッリに向け

て叫ぶ。すると足跡をたどれという応答が聞こえた。ただ、消えぎえの足跡にそって登るが、彼らの姿はない。さらに登る。やがて手足の感覚を失ったアブラモが氣力を失い、C8に下りる。残るはボナッティとマハディだけとなる。

18時半、南斜面と東斜面とを分かつこぶに着く。そこで足跡は消えてしまう。マハディが昂ぶっている。ボンベが肩に食い込む。ここで酸素を吸えばどんなに元氣を回復することかという思いが残るが、マスクと混合弁はラチェデッリとコンパニョーニがもっていて手元にはない。夜の帳が降りる。ふたたび叫ぶ。応答なし。直登して、大きな岩塊を越える。しかしテントの影はない。懐中電灯をさぐり、灯そうとするがつかない。それにしても予めの取り決めにどうして彼らは変更したのか。どこかに隠れているのか。マハディは正氣を失っており危険だ。ここからC8に下ることは、もはや不可能だ。

けを試みる。すると驚くことに、上方で明かりが灯った。彼らだ。「おい、おれたちはここにいる。どうして今ごろになつて応答するんだ」。するとはっきりした声で、「お前たちのために、夜中じゅうおれたちがテントの外にいないでいるのか」という返事が返る。そして「ボンベはあるか」と問う。あると答えると、「そこにおいておけ。そしてお前たちはC8に下りろ」と言う。「できない。おれは下りれるが、マハディは常軌を逸している。いま彼は壁を登り始めている」。事実マハディは、明かりのある2人の方に行こうとしていた。だが、マハディがさらに登り続けたとき、上方の光は消えた。ボナッティは、彼らが迎えにくるのだと思つた。だがそれはムダな期待、それ以後いつさい応答はなくなった。

陽が雲海の上からのぞく。31日早朝6時半であつた。彼らは、酸素ボンベの上に積もった雪を除き、それらを見えやすい場所におく。そして最後の合図として叫びつつ、見えない2人に向けてピッケルを振つて、下降を開始した。そして下方のクレバス帯を越えたところで、ふたたび声をかける。すると上方から応答の声が聞こえた。その時、予め彼らのために置いた酸素ボンベを見たが、元の設置場所にあり、なお回収されてないことが確認された。

こうしてC8に戻つたボナッティは、やがて午後5時半すぎ、登頂隊員2人が頂上直下をゆつくり登っているのを見届ける。そして登頂を済ませたラチェデッリとコンパニョーニが、C8に戻つたのは午後11時のことであつた。

酸素ボンベの謎

イタリア隊によるK2の初登頂は、こうしてボナッティとマハディによる生死をかけた献身によつて成功した。しかもその成功は、ある時点まで酸素ボンベを用いたが、やがて空になり、最後の2時間ほどは酸素ボンベの助けな

しで頂上に達したという登頂者の報告によつて、その偉業が喧伝されることになった。もちろん報告書には、30日の夜、コンパニョーニとラチェデッリが居場所をくらませ、ボナッティとマハディをして生死の淵に追いやつた、その卑怯かつ非情な行動はいつさい言及されていない。

このことはさておき、ボナッティには、酸素ボンベ使用をめぐる疑問がふつきれない。コンパニョーニの報告書では、彼らはC9を薄明のなかで出発し、1時間余をかけてボンベを回収した。それからボンベを使用したが、16時ごろボンベが空になり、それ以後、頂上まで酸素補給なしで登つたことになつている。

もし報告どおり薄明のなかを出発したのなら、出発は4時半ごろだ。1時間余をかけてボンベを回収したなら、酸素使用開始は6時過ぎとなる。だが、ボナッティがC9を下り、クレバス帯を通過した7時半過ぎ、彼が見上げたとき、ボンベはまだ置いた場所にあつた。するとこの報告の発表時間及びボンベ回収時がまず疑問視される。回収時刻はもっと遅く、

8時前後のはずだ。

しかも同じ報告書で、彼らは、ボンベ回収時その圧力は、それぞればぼ80気圧だったという。もともとボンベは220気圧であつたのに、なぜかくも下がっていたのか。おまけに、もし80気圧しかなかったとしたら、普通に使用して3時間半しか持たず、11時ころには空になる勘定だ。ところが、彼らは酸素は16時に空になったという。80気圧という報告自体が疑われる。

のちにボナッティの真実をめぐる闘いが始まって以後、彼らは80気圧になっていた理由に、ボナッティとマハディがC9へのボツカ中に吸ったからで、そのため自分たちが酸素切れの危険を受けることになったという。だが、

もともとマスクと混合弁をもたないものがそれを吸うすべもない。

220気圧あつたのであり、10時間ほもつたのだ。そして6時過ぎでなく、8時過ぎに酸素を吸いはじめたとすれば、それはほぼ登頂時の午後6時ころまでもつ勘定になる。午後4時に酸素が切れ、その後2時間を酸素なしで登頂したという報告も含めて、彼らの報告

には、事実のねつ造があることが明らかだった。

登頂前夜、C9でのコンパニヨーニとラチエデッリによる非情な仕打ちが、ボナッティに忘れられない経験となつたのに加え、登山史上での事実のねつ造を糺すという真実に向けての闘いは、こうして開始された。

そして事実の糊塗に最後のとどめを刺したのは、ある山岳誌に載つた登頂時の写真だった。そこには頂上で勝利の旗を掲げる登頂者の足元に、背負子のなかの赤いボンベが写つていた。20^キもする空になったボンベを、頂上までのさらなる2時間を担ぎ続けたはずはなく、最後まで使えたのだ。ボナッティの推理は、この写真によつて裏打ちされた。

こうしてそれまでボナッティの抗議を無視し続けたイタリア山岳会も、ついにフォスコ・マライーニを含む事実調査委員会が立ちあがつた。半世紀にわたるボナッティの真実への闘いは、報いられることになったのである。

JACとなじみの深い、加藤保男の軌跡をたどる企画展

登山家の加藤保男は、世界で初めて冬季のエベレストに登頂し、下山中に消息を絶つてしまつた。その加藤の足跡を振り返つた「登山家加藤保男と大東文化大学第一高等学校」展が、東京・板橋の大東文化歴史資料館で開催中だ。

加藤は、同校在学中の1966年、兄の滝男が創立した山岳会J.E.C.C.に入会、岩登りや雪山登山を始め、わずか3年でアイガー北壁直登ルートに登つてしまふ。その後もアルプス三大北壁を登るなど実力をつけ、1973年には第Ⅱ次R.C.C.エベレスト登山隊に参加、幸運にも世界初のポスト・モンズン登頂者となる。

東稜から単独初登頂、春と秋の登頂者となつた。当時、加藤は隊員たちの多くの知遇を得、後に山岳会会長にもなつた隊長も含めて、隊員たちの信頼も厚かつた。

今回の企画展は、冬季エベレストに3度目の登頂を果たし、消息を絶つて30年になるのを機に、高校時代の友人たちが企画したものだ。初公開の日記や写真も多数展示され、懐かしいものばかりである。加藤の行績を風化させないためにも、ゆかりのある会員にはぜひ足を運んで、偲んでもらいたい。

会場は東京・板橋区高島平の大東文化歴史資料館(大東文化大第一高校に隣接)。入室無料。会期は3月16日まで、月々金の9時〜17時(祝日、入学試験期間中と休校日は閉室)。問合せ先Ⅱ第一高校事務室 ☎03-5399-7890へ。

ミュージアム

メスナーのプロジェクト最後の山岳博物館(下)

岡澤祐吉

メスナーがこれで最後、これ以上の博物館計画はないとして開館した「リパ」にしても、日本ではあまり聞いたことのない古い街並みの残るブルネックから、徒歩で数分のところだという。確かクラウゼンという街もそんなところだった。フィルネス方向とは反対側の、駅から少し歩いたところに街の中心街があり、そこから見上げた高台に中世風の城郭があった。

メスナーが今回作った「リパ」も、元はといえば中世の司教が避暑用に使っていた館ということなので、クラウゼンで見たような古い城郭なのだろう。一時、学校として使われたこともあったが、ここ数十年は崩れるままになっていた。その城をメスナーは史跡保存という厄介な制約を受け入れて、博物館として維持運営することにしたのである。そして、彼が関わった世界中の山地住民の使っているさまざまな民具などを集め、分かりやすいよう触れてもよいように展示してあるという。

「僕にはずば抜けた収集癖がある。旅をしながらたくさんものを見て、その幾つかを持ち帰った。来館者に僕の経験を分けてあげることができる」

誰にでもはつきり分かるような展示は、モンゴルのパオと高峰の遠征隊が使用したベースキャンプが対照的に置かれた所である。

一方が山地住民の生活の場で、他方がメスナー言うところの、山を我がものと勘違いした登山家たちの一時的な生活の場である。簡単ではあるが違いがはつきりと分かるように展示されているという。展示物のなかで、アフリカの首狩り族からの贈呈品だというミイラ化した生首が象徴するように、「リパ」のかなりの部分はアフリカの山地住民のものらしい。メスナーの気持ちのなかに、未開の、アフリカという文明から遠ざけられた広大な大陸があるのかもしれない。

「都会人による山の独占、それが近代アルピニズムだ」と、メスナー

は言う。「アルピニストが山登りのためにつけた道、それはアルピニストが登るずっと前からあった小さな道だ。それを知ってもらうことが重要なのだ」

メスナーのこの言葉を受け、この徹底した自己批判的転換が展示物の魅力を構成する、とレポーターのライトナーは記している。今でもモンゴルやチベット、あるいはネパールの一部でも見られる土着の山地住民と比較するため、メスナーの言葉を借りるのなら、「近代的遊牧民」、すなわち「今日までほとんど正確に山を理解していない」登山家を示し、今回の展示の前提条件が、問題提起されている、とライトナーは続ける。

近代登山のあるところに文化がある、とは日本の登山家にとって耳なれた言葉だ。メスナーは自分の山登りも含め、すべての近代登山を否定するかのようでもある。

日本の山はヒマラヤやヨーロッパ・アルプスなどと比べれば丘みたいなものだろう。その丘のような山に、昔は天狗が棲んでいた。山姥はいなくなった。炭焼き小屋もほとんど見られなくなった。日本狼は絶滅したという。山には保

護されたシカが増えすぎ、猟友会会員は高齢化し、作物荒らしの獣を駆除しきれなくなった。日本の山間地は過疎化に歯止めがかからない。

■ 7

トラベル 東ヨーロッパ講演旅行

2011

中村保

バンスコ国際フィルム・フェスティバル—ブルガリア

2010年秋の、「ポーランド世界探検家フェスティバル」が縁で、ブルガリアのバンスコに招待されました。バンスコは首都ソフィアの南170^{キロ}、海拔925^{メートル}に位置し、東ヨーロッパ随一のスキー・リゾートです。地元の人によると、十数年前にはホテルはわずか3軒だったそうです。今は、ホテル、リゾート・マンションが200軒も建っています。

私はこのフェスティバルのメイ・ゲストの荣誉に浴しました。開会式には賑やかにブルガリアの民謡、民族舞踊などが披露されました。ゲスト8名の国(日本、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリア、マケドニア)の国旗が踊りとともに旗がはためき、歓迎の意を表してくれました。とても感激しました。

200人ほどの聴衆を前にした私の講演テーマは、「To the Final Frontier-Alps of Tibet and

Beyond」です。私を紹介する主催者のあいさつで、ペーター・ペトロフさんは英文ジャーナル『Japanese Alpine News』にふれ、内容がクライミングだけに特化せず、広範なテーマを取りあげており、自分たちの手本にしたいと言ってくれました。

これとは別に中学生の地理の勉強のために、2009年秋の踏査行のスライドショーを行ないました。近在の中学生とおとなが150人ほど来てくれました。

日本人にはブルガリアは「ヨール」と、相撲の「琴欧州」で馴染みですが、「薔薇(ローズ)」が有名な国です。バンスコでは、海外で初めて日本語で講演を行ない、ブルガリア語へ通訳をしてもらいました。

ブラハ国際アルピニズム・フェスティバル—チェコ

18年の歴史をもつチェコ・プラハの国際アルピニズム・フェスティバルの規模はヨーロッパ最大



バンスコで講演する中村氏、海外で初めて日本語での講演となった

で、毎年3000人以上が参集します。日本人が招聘されたのは、私が初めてです。

フェスティバルは「ネパール山岳2011年」を記念して、ネパールのアジア・トレッキングが協賛しました。その関係でネパールからは、アン・ツェリンさん、ネパール山岳協会、ネパール外務省高官を含め5名が参加していました。

ブラハ市のナショナル・ハウスが会場で、大がかりな展示、アウトドア用品会社の出店、オーストリア・チロルの大きなブースなど、じつに充実しています。講演のためのホールは1階だけで550席

の椅子があります。大スクリーン
の映像は鮮明です。

ネパールについては、「エコ・リサーチとレスキュー・プログラム」と、今春に計画されている3カ月間でカンチェンジュンガからネパール最西端まで踏破する「ネパール東西横断トレッキング」が紹介されました。連日たくさん
の聴衆がホールを埋めていて、若者も多かったです。

プラハでの講演は、2003年以来13カ国27回目の海外講演になります。講演には400人ほど集まってくれました。テーマはバンスコと同じです。1時間半のスライドショーの後、東チベットの許可問題など、たくさん
の質問を受けました。

講演の終わりのあいさつで、「東チベット奥地への許可取得は極めて厄介だが、もっと難しいのは妻の許可です。いつも今度が最後だと言って出かけて行くので信用してくれませんか」と話したら、ナイス・エンディングだと言って褒められました。

両国で本当に心温かいもてなしを受けました。新しい友人が増え世界がさらに広がりました。

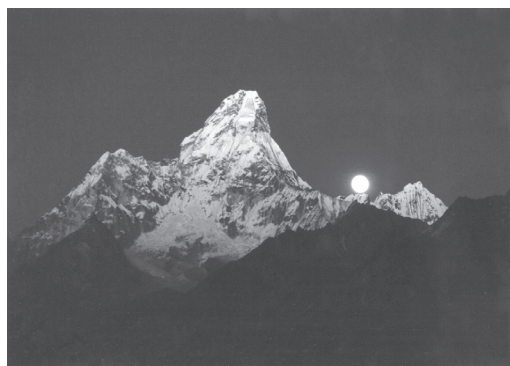
東 西 南 北

アマ・ダブラムの月

竹 勝 生

私は日本山岳会恒例の図書交換会を楽しみにしており、毎年数十冊の本を申し込んでいる。今年入手した本のなかに、宮原巍さんの『ヒマラヤの灯』があり、夢中になって読んだ。これはホテル・エベレストビュー建設の記録で、著者自身が述べているように、正にアドベンチャーそのもので、艱難辛苦の物語である。私たち夫婦は8年前にこのホテルに宿泊しているが、この本に刺激されて再び訪れることにした。

ホテルのベランダから眺めるエベレスト、ローツェ、アマ・ダブラムなどの大景観は記憶に新しいが、今回はそれに加えて満月の夜の景色を期待して、出発の日を決めた。



アマ・ダブラムの右肩から姿を現わした満月

11月7日、成田を発ち、予定どおり10日に標高3880^{メートル}に建つホテルに到着した。

午後の日差しに山々は燦然と光り輝き、特にホテル周辺のタムセルク(6608^{メートル})は、ヒマラヤ襷も鮮やかにそびえ立ち圧巻であった。妻はスケッチに余念なく、私はカメラで光の変化を追い続けた。やがて山肌は金色から茜色へ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

と眼の醒めるような色彩のドラマを展開して、アマ・ダブラムの頂稜に最後の光芒を放って、青白い残照の帳に包まれた。

ここまでの眺めは、まことに感動的で何度見ても飽き足らないものだが、今回は更にこの後の満月との調和に期待がふくらんだ。

闇は次第に深まり、かすかな残照が白雪の山並から消えようとしたその時、絶妙なタイミングで満月がアマ・ダブラムの右肩から姿を現わした。深い藍色の空を背景に、かすかに残照の紅色に染まり颯爽とそそり立つアマ・ダブラムに寄り添う白い月。予想以上の構図と色彩の妙に、シャッターを押す手が震えるほどであった。

1951年のシプトンのエベレスト探査隊報告書で紹介されて以来、この山はエベレスト街道を往来する登山者やトレkkerを魅惑し続けていて、多くの写真や絵画が発表されてきた。ジョン・ハントはその著『エヴェレスト登頂』のなかで、ティンボチエを世界で最も美しい土地のひとつと称え、そこから眺めるアマ・ダブラムについて「到底近づけなくみえた。マッターホルンの素晴らしい姿も

かなわない。まずカラコルム奥地のムスターグ・タワーと比べてよいものである」と述べて絶賛している。この山は1961年3月、エドモンド・ヒラリーを隊長とするニュージールランド隊によって登頂された。

私はこの素晴らしい山の満月を写真に収めることができたが、これは極めて稀なことだったと知ることになる。翌日の夜、再度の撮影を期待したが、月の出が50分ほど遅れ、その時は太陽がすっかり沈んでいて山は完全に闇に飲み込まれていた。私たちは幸運であった。しかし、幸運は続かなかった。

その次の日から天候は悪化し、ルクラへ下ったところからは気温も下がり雪混じりの雨模様となった。カトマンズへの飛行機は欠航となり、暖房のないロッジで4日間停滞するはめとなった。妻は風邪をひき食欲が日増しに低下し、気が気でなかったが、5日目にチャーターしたヘリコプターも途中のラミダンダという寒村に着陸してしまい、牛小屋のような部屋で一晩を過ごすことになった。

翌日、やつとの思いでカトマン

ズに戻ったが、帰国の便が取れず、キャンセル待ちの人で空港は混雑していた。季節外れの天候悪化で行き場を失った旅行客でホテルは満室となり、私たちは宮原さんの経営するホテルの社長室で宿泊させていただいた。その夜、妻は高熱を発し、身体の自由がきかなくなってしまった。

3日間の医師と看護師の懇切丁寧な看護のお陰で、ビザの期限ギリギリのところで退院でき、空港へ直行した。幸いビジネスクラスに席が取れ、予定より8日遅れの帰国となった。宮原さんはカトマンズ滞在中の毎日、手作りのお弁当を届けてくださった。

保険期間が切れて、高額の治療費でおちおち入院してられない気分であつたが、宮原さんが値引き交渉してくれ、3割引きにしたもらった。ネパールでの買い物では、値引き交渉は常識だと聞いていたが、まさか治療費まで値引きの対象になるとは驚きであつた。登山も旅も予定どおりいかなかった時のほうが、想い出が深く得るところも多いものであるが、今回の旅はまさにそうであつた。

海外の主な山岳会

鈴木正規

日本山岳会といえ、今や世界のどこと比べてもひけをとらない伝統と権威を持つ会となつている。しかし、最近の入会状況を見ていると、中高年ばかりで気がかりである。そこで、海外の山岳会の現状を記してみよう。

英国山岳会 (Alpine Club)

英国山岳会 (AC) の設立は1857年11月である。ウィリアム・マッシューズが、バーミンガムの彼の家で晩餐会を開き、英国山岳会の組織を話し合つたのが最初である。

この晩餐会で創立会員になるよう交渉した人々のうち数名は関心を示さなかつた。招請を承諾した人たちは、1857年12月に、コヴェント・ガーデンのアシユリ・ホテルに集まつた。そして、E・S・ケネデイを議長にして世界で最初の山岳会を創立したのである。

会報の『アルパイン・ジャーナル』は創刊以来今日まで、登山史上の重要な文献として貴重な寄稿が数多く収録されていて、高い評

価を受けている。

現在の英国山岳会の会員数は、入会の厳しさが影響して、1500人に達していないようだ。

スイス山岳会 (Schweizer Alpen Club)

1863年4月にスイス・アルペンクラブ (SAC) として創立された。SAC創立当時、英国からスイスにやって来る登山家たちは、いわばブルジョアであつた。そして地元スイス人の多くは、彼

らのガイドとして生活に直結した山登りに親しみ、山の中に生活を持ち、山とともに何代にもわたり生きてきた。

もちろん、伝統的な英国アルパイン・クラブの影響を受けていたことは否めないが、いわゆるクラブ組織とは異なつて、それぞれの支部で活動している。会員数は3500名ほどといわれ、支部数は24支部からなつている。会誌は『Schweizer Alpen Club』である。イタリア山岳会 (Club Alpine Italiano)

イタリア山岳会 (CAI) は、モンヴェーゾの最初のイタリア登山者であるクウィンティノー・セッラの提唱によつて1863年

に創立された。現在の会員数は6500名ほどである。

フランス山岳会 (Club Alpin Franais)

フランス山岳会は1870年に創立され、現在は60の支部を有し、120の小屋を管理している。会員数は約3万人で、入会は会員2名の推薦による。なお、会の内部に一流のアルピニストのみを厳選した「高嶺会」がある。

会報は年5回の『山岳』(La Montagne)のほか、各支部の支部報がある。

アメリカ山岳会 (American Alpine Club)

アメリカ山岳会 (AAC) はロンドンのACと同様、入会者には厳格な資格と手続を要求している。現在の会員数は約465名で、会誌は『AMERICAN ALPINE JOURNAL』である。

カナダ山岳会 (Canadian Alpine Club)

カナダ山岳会は1906年に2人によつて創立された。現在は21支部、3400名ほどの会員がいる。会誌は年に2回発刊されており、支部の報告書は別に発刊されている。

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

秋田支部

太平山・前岳に案内板設置 と刈り払い

この事業は、23年度総会で承認され、私と鎌田会員が担当となった。目的は、秋田市にある霊峰・太平山。特に、前岳から中岳までのコースは、四季を通しての人気コースになっているが、女人堂から前岳への歩道がはつきりせず、ほとんどの登山者は、前岳には登らず、左側斜面の回り道を通り、一ノ沢分岐に出て中岳へと向かっている。

秋田支部では2年前に、前岳入口や山頂へ、案内板や標柱を設置したが、悪質な登山者により撤去されてしまった。再度、案内板を設置することにし、私が秋田杉材を準備、「前岳へ」「女人堂」「中岳へ」と彫刻し、作成した。

昨年11月6日、前岳登山口・二

手の又駐車地点に14名が集合した。天気は曇り、小雨模様で心配だったが、この日を逃すとこれからは雪が予想されるので実施することになった。ミーティングを行ない、それぞれ案内板や作業用具一式を分担して背負い、8時30分出発。

雲が流れており、天気はどうかもちそう、山の気温はヒンヤリとして作業にはちょうどよさそうである。ジグザクの急な登山道左右の、黄葉しているオオバクロモジの木が実に綺麗である。途中、ブナの倒木が登山道を塞いでいるので、鉋、鋸で処理をする。金山滝分岐で小休止。ゆっくり登り、タイムも順調である。女人堂を通過し、9時50分、前岳到着。

歩道整備と案内板設置に取りかかる。それぞれ、草刈機や平鎌、剪定バサミなどでヤブを払い、案内板を取り付ける。女人堂から一



作業を終えて記念撮影

ノ沢分岐までの旧道も無事に復活、多くの登山者がより楽しく安全に登れるようになったと思う。昼食は前岳山頂でフライシートを張り、賑やかな恒例の昼食会となった。

下山時には、女人堂周辺歩道の刈り払いも行ない、14時40分、駐車地点着。有意義な1日であった。

(堀井弘)



おつるん山にて

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

「語りかける山——山岳図書を語る夕べ」

日本山岳会の図書委員、飯田年穂氏は明治大学で教鞭をとる比較文化学者である。ボナッティの『わが生涯の山々』を近藤等氏と共に訳しているからすでにご存じの方も多いかもしれない。40歳を越えてから登山にうちこみ、ヨーロッパアルプスの多くのルートを登攀する一方、西欧の自然と文化とのかわりを中心に研究を行なっている。

飯田氏は昨年、日本と西洋での人と山とのかわりをテーマに『語りかける山』を書いた。氏が『岳人』に連載していたエッセイをもとに、そこで語ったテーマを展開した本である。

昨年12月12日の「山岳図書を語る夕べ」は、「語りかける山」と

題して飯田氏の話を聞く機会を設けた。さらに『語りかける山』の装丁を担当した小泉弘氏にも出席していただき、ブックデザインの面からこの本を掘り下げてもらった。

当日は山岳書愛好者を中心に30人の出席者が集まり、期待を込めて飯田氏の語りを待った。

まず飯田氏はICUで教鞭をとっていた関屋光彦氏の話から「causerie（談論）」という言葉をもち出し、形式ばらずに話したいというところから話をはじめた。これは著書『語りかける山』の語り口であり、知らず知らずのうちに読者や聴衆を氏の世界に引きこんでいくキーワードでもある。語りは一つのことからごく自然に次の話題、次の話題へと流れていき、まるで雑談のような気安さで西欧の山と人とのかわり合いを比較文化の面から解き明かしていく。



『語りかける山』について話す飯田年穂氏

飯田氏が登山に興味を持つようになった理由、『語りかける山』を書いたいきさつなどを話している。最初は日本と西洋との山岳文化の違いが明らかにされる。

どこに住んでいても山が見え、山と生活が切っても切れないつながりがある日本に対し、山岳地の占める割合が全体の2割しかないヨーロッパ。一般の西欧人は山らしい山を見たことがなく、アルプスを見る機会があつても山が好きになれないという。彼らにとつて山は、アルピニズムという関心の対象に限られてしまうのだ。

ただ、山岳地方にはそこ独特の山の文化がはぐくまれていているという。飯田氏は映像を使いながら、

歴史的なアプローチからそれを説き起こしていく。

サヴォア地方では、牛や羊を水河などの高地へ移動させることもあり、そのころの様子を今も土産物のモチーフで見ることができている。アルプスには水晶採り、カモシカ狩りの猟師、さらには密輸業者が入り、後年彼らがガイドになったこと。どの話題も知的好奇心を刺激し、参加者の興味を惹きつけてやまない。

最後に飯田氏が「今後このような土着の山岳文化を研究していきたい」と結んだとき、ほとんどの

参加者は時間が短かったと感じたに違いない。

飯田氏の話のあとは、それを引き継ぐように小泉弘氏が、ブックデザイナーの目から『語りかける山』を語った。小泉氏は装丁を手がけるようになって36年。「登山は知的でエレガントなスポーツ。そのため山の本は二枚目でエレガントな本にしたい」と考えるロマンチストである。

『語りかける山』を読んで飯田氏の読書量に感銘を受けたという小泉氏。本の著者にぞっこん惚れ込んで装丁するその姿勢は、本を書く者にはこの上なく嬉しいことに違いない。氏が「山の本」の制作に携わっていること、それはきつと山岳書を愛好する私たちにとっても幸せなことなのだろう。

短い時間とはいえ、山の本の楽しみをしみじみと感じさせてくれるひとときだった。

(近藤雅幸)

集会委員会

八方スキー懇親会

1月15日から2泊3日の集会委員会主催の八方スキー懇親会に参加した。この会には以前から参加したいと思いながら実現しなかった。昨年末、晚餐会箱根山行に参加した時に初めてお目にかかった方との雑談のなかで、八方スキー懇親会にご一緒出来ることになり決心した。

残り時間まだまだ有ると強がりて一年の計を記す初春

宿泊は白馬みそら野のペンション「グローブ・イン・スカラ」で、



ペンション「グローブ・イン・スカラ」の前で集合写真

山を愛し、山に登る男たちと、山とともに生きる生物を描いた版画家・畦地梅太郎画伯の珠玉の作品約50点が展示されている。滞在の3日間は終日自由行動、最終日は記念撮影後、解散の日程である。

第1日目、夕食時までには参加者25名のほとんどが到着した。夕食は集会委員長・下河辺史郎氏の乾杯で和やかに始まり、評判の美味しい料理をいただいた。ペンションのオーナー石田弘行氏から、ペンションの名前が「林の中の雪の女神」との意であること、白馬周辺の最近の登山事情、畔地作品収集の経緯などのお話をお聞きました。

第2日目、参加者各自、目的のゲレンデでスキーを堪能した。八方尾根スキー場は雪質良好のロングコースで滑りがいいがあった。白馬三山、五竜岳、鹿島槍の眺望は素晴らしかった。

かの夏に登りし白馬三山は雪をいただき神のごとしも

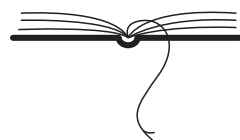
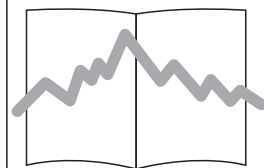
夕食は、大津市から遠路参加の永年会員、終身会員の向井裕彦さんの乾杯で始まった。初対面の方々とも打ち解けて、賑やかに盛

り上がった。

第3日目、無風快晴。朝食、記念撮影の後、解散した。計画立案の集会委員会、一緒に滑ってくださった皆さん、ありがとうございました。

(高井やす子)

図書紹介



『歩くこと、登山は賢者のスポーツ』 大森薫雄・著



2011年12月
パレード刊
B6版 120頁
定価 800円

これは故大森薫雄さんの遺言から生まれた著書である。大森さんの5冊目、最後の本である。そして、著者はタイトルについて多くを語っていない、珍しい内容になっている。思うに、彼はなんとかしてもこの本を仕上げたかったと思われるが、それがかなわなかった。故人の遺志を受け継いで、奥さま靖子さんと2人のお嬢さんが出版された。

「歩くこと、登山は賢者のスポーツ」は大森さんの口癖だった。しかし、彼がこの言葉を口にするようになったのは比較的晩年になっ

てからのことである、という気がする。

自分の生きざまを残そうと決意して、原稿を書き始めて何冊かの著書を出版したところから、口にするようになったのではないかと思う。本を書くこととすると、多くの参考とすべき本を身近に引き寄せ、熟読し始めるは世の常である。その過程で、多くの優れた表現や言葉に出会い、それらが自分の考えに近しいものに思えたに違いない。

そして、それがいつしか自分の言葉になる。そのことから、大森さんはJAC副会長や日山協の副会長に就任して、各地でのあいさつの機会が増え、この言葉を多用するようになった。「歩くこと、登山は賢者のスポーツ」とは、山に登り続ける人たちにとっては嬉しい言葉であり、誇らしい気持ちにさせてくれる麻葉のような響き

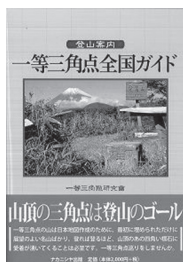
がある。人が山に登るきっかけはさまざまであるが、山に登り続けるにはわけがある。それはひとえに山の魅力に取り付かれるからであると思われる。

若くして山登りに開眼し、激しい登山を続けてきて、ふと気がつけばいい歳になっていて、静かな山登りの時を迎えるころ、人生を振り返って、「歩くこと、登山は賢者のスポーツ」だと断言できるのは、大森さんの人生の美学に違いない。

(山本良三)

一等三角点研究會・編著

『一等三角点全国ガイド』



2011年11月
ナカニシヤ出版刊
A5版 259頁
定価 2100円

近代日本の国土の輪郭は、明治初年に始まった三角測量によって明確になったことはよく知られているが、この測量の一番の基礎になる一等三角点は、現在、全国に(a)高度500メートル以上のもの546、(b)500メートル以下が429、合わせて975点あるという。この本は、都道府県ごとに高度

順に前者のすべてを、さらに後者しかない千葉、沖縄両県をふくむ47府県から最も低いものを、総数593の一等三角点のそれぞれについて、点名、山名、選点年、標高、経緯度などの数値のほか、記載される五万分の一図幅名、所在する所番地を説明する。それだけではない。主要鉄道駅または国道、府県道から駐車場を経て標石が埋設された場所にいたる簡潔な「三角点道」を記し、古風で趣のある旧字体で刻された場合が多い一つひとつの標石の写真までを見せてくれるのだ。

全体の構成は、巻頭5ページの概説につづき右に述べた本体をなすガイド部分が230ページあり、「三角点の基礎知識」、「三角点ごぼれ話」という二系列のコラム記事30余篇が適宜に配されている。表紙見返しに一枚の全国分布図、巻末に資料として付表6ページがつく。

一例として、富士山には二等三角点3775・6メートルが設置されているために日本最高の一等三角点をもつ榮譽に輝く南アルプス赤石岳の三角点を紹介しよう。

「赤石岳 標高3120・06メートル。基準点コード(省略) 選点明

治14年(1881) 地上埋設 1
 /5万図名赤石岳 北緯(数値省略)東経(同前) 所在地長野県下伊那郡大鹿村大字大河原」と記載されている。三角点道は「大井川鉄道井川駅から県道60号線を走り、畑薙ダム駐車場に駐車。専用バスで榎島登山口に。樹林の尾根筋を登り、赤石小屋を経て富士見平から稜線に乗り日本一高い一等三角点に着く」と記されている。

編著者一等三角点研究會は、1963年、今西錦司氏が山の友人に声をかけて京都で創立された同名の会を前身にもつ。2007年に再編されて新発足したものであり、一等三角点の研究者や同好の士が全国に百数十名いて熱心な活動を続けている。今回の出版では大槻雅弘会長ほか二氏が直接執筆を担当、ほかに編集・資料提供および写真撮影者として20余の氏名が列記されている。

これだけの内容をもつ本は、なるほどわずかの人数で仕上げることはむづかしく、とりわけ写真の調整などにはチームワークの利点を生かすことが要請されると思われる。また一方では、興味深く読まれるためにはきめ細やかな編

集が行なわれることが必須であつて、本書はこのバランスにうまく成功していると評価したい。

約600枚の標石の写真はほぼ5割弱がカラーになっているように思うが、今の時代、目に入る情報量においてカラーはモノクロに数倍する力をもつという印象を与えられたことを付記しておきたい。山頂に、または稜線の一角に立つて私たちを待つ一等三角点は、はたして何を物語ってくれるのであろうか。

(酒井敏明)

ドイツ山岳会 オーストリア山岳会・ 南チロール山岳会共編集発行 『BERG2012』



2011年
A4変形 254頁
17,80€

ドイツ山岳会、オーストリア山岳会、南チロール山岳会の2012年度版の会報。南チロールは第一次世界大戦後にオーストリアからイタリアに割譲された地域で、今もドイツ語を常用する人たちが多く

住む。3つの山岳会が結束することによってドイツ語地域全体がカバーされる。

2012年がオーストリア山岳会創立150周年の節目に当たるので、今号はオーストリア領の南チロールの岩峰についての紹介に一段と力が入っている。美しい写真を惜しみなく入れて、特徴のある岩峰を見てまわるハイキングから岩壁登攀やモーター・バイクによる縦走まで、会員の幅広い関心に応えつつ啓蒙と山岳スポーツ実践へのガイドをたくみなバランス感覚で行なっている。

日本山岳会の年報『山岳』は、会員の登山実績の報告から物故会員への追悼の辞、そして会務報告に至るまで、過ぎ去った1年を回顧する記事に満ちている。一方、ドイツ山岳会など3つの山岳会の編纂する年報は前年のうちに発行されて、来年の登山計画のためのヒントを提供しようという意思の産物である。ドロミテ山地の南西部に位置するブレンタ山群について多くを語る。

来る年へのガイドばかりでない。過去1年間の世界の登山界の動向についての情報提供も忘れて

いない。特に目立つのが女性たちの登山についての考察と業績についての報告である。カメット東南稜の「侍ルート」を完登したタニグチ、ボルダリング界で活躍したノグチの名もあげられている(109頁)。難度の高い岩壁や氷壁に挑む女性たちへのあたたかい眼差しは、ウィーン気質の表われの山岳版といったところだろうか。

ページを繰るうちに視野が広げられ、現代の登山の多様さを紹介する章の続くなかに、オーストリア山岳会150年の歴史からの話題をさりげなく織り交ぜて、登山史の隙間を埋めることも怠らない。

ドイツ語を理解できない人たちにも本書を手にとって見ていただきたいと私は思う。山岳会の会報の内容と性格について考える機会になるだろう。公益法人化となる日本山岳会が、会報を会員と非会員の区別なしに山岳スポーツ奨励に役立たせようとする意思をもつ場合に、啓蒙精神に裏づけられた編集方針を実践するこの年報が好ましい実例のひとつとして役立つにちがいない。

(宮下啓三)



平成23年度第10回(1月度)理事会 議事録

日時 平成24年1月11日 19時より21時30分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、吉永・西村

各副会長、高原・森・

小林各常務理事、野澤・

中山・永田・萩原・節田・

志賀・古野・川瀬各理事、

平井・浜崎各監事、宮崎・

橋本各常任評議員

審議に先立ち尾上会長から、年頭の挨拶があり、平成24年も課題山積であり、これに会員及び理事会メンバーの皆さんと一丸となつて取り組んで行く決意表明がなされた。

【審議事項】

1・定款施行細則について(会長)

役員の選任(任期、定年)、終

身会費、会員資格復活について次のように審議された。来る3月開催の総会に付議したい。

(1) 役員の選出

役員は連続して2任期を超えて選任することはできない。理事は選任期において満70歳を超えないものとする。

(2) 終身会費

入会後10年以上在籍する者の終身会費 39万円

入会後20年以上在籍する者の終身会費 31万円

入会後30年以上在籍する者の終身会費 22万円

入会後40年以上在籍する者の終身会費 11万円

(3) 会員資格復活

終身会員及び永年会員の在籍年数の計算は、旧会員であった在籍年数を算入するものとする。

2・海外登山基金取り崩しについて

(会長)

今後、会員獲得、会員若返りに貢献の大きい「JACユースクラブ」の活動を重点項目としたい。そのためには、人材と相応の資金を必要とする。ついては平成24年度に500万円、25年度に500万円の合計1000万円を、将来への投資として予算計上をしたい。財源は海外登山基金に求めたい。

なお、その活動の一層の強化のためのグランドデザインを作成することを条件とする。(承認)

3・東海支部・猿投の森隣地寄付申し入れについて(吉永)

東海支部・猿投の森に隣接する瀬戸市上山路町の山林1万5416平方メートル(約4663坪・傾斜地・相続財産)を寄贈したいとの申し出が相続人からあり、これを受贈し活用する。(承認)

4・規程類の制定について(高原)

規程類管理規程、経理規程、支部に関する規程(支部規約の必要的記載事項含む)の原案説明があった。(承認)

なお、その他の諸規程は新法人移行PTに委ねることとする。

5・海外登山基金委員会委員の委嘱について(高原・萩原)

海外登山基金委員会委員は次の通り。なお、任期は平成23年6月18日から平成25年総会日まで。委員長・吉永英明(7045)新任委員・小川武(6305)再任

池田常道(7641)再任

永田秀樹(8020)再任

相馬 勉(9362)再任

貫田宗男(10106)再任

松原尚之(10507)再任

谷川太郎(11705)再任

古野 淳(12194)再任

事務局・萩原浩司(13057)再任(承認)

6・入会希望者について(高原)

9名(内、1名は復活会員)の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1・平成24年度予算について(小林)

平成24年度予算編成方法、予算書形式等の素案(タタキ台)についての説明、質疑応答が行なわれた。

【報告事項】

1・新法人移行PT(吉永)

3月の総会頃までには公益法

人認可が得られるよう鋭意取り組む。

2・文科省平成23年度特例民法法人概況調査(高原)

例年通り所定用紙に記入し、1月6日付にて文科省競技スポーツ課宛に提出した。

3・ヤマ・ネット・ジャパン運営委員会からの協力願い(高原)

12月26日付で「国際山岳年+10の行事」への協力願いがあった。実行委員に尾上会長、窓口を高原常務理事とする。

4・所蔵写真等の雑誌掲載許可願(高原)

(株)新潮社から12月27日付にて当会所蔵4枚(加賀正太郎とヘスラー、武田久吉、上高地河童橋上のウェストン夫妻、マナスル初登頂の際のガルツェン)を雑誌『考える人』2012冬号に、(株)地球丸から『山岳』創刊号の表紙写真を、『TRAMPIN』2月号に掲載許可願があり、承認した。

5・四国支部設立(高原)

先月の理事会決定の条件が満

たされ、設立が承認された。

6・事務局体制(高原)

現在の体制(昨年10月以降と同様の職員2名の他支援員1名(3名のシフト交替)による)を3月末まで継続する。

7・都岳連からセルフレスキュー講座等の案内(高原)

(社)東京都山岳連盟・遭難対策委員会から冬山セルフレスキューと雪上搬送法の講座の案内があった。

8・富士山国有林における新たな捕獲手法によるニホンジカ捕獲実施(高原)

富士宮市鳥獣被害防止対策協議会、静岡森林管理署等から1月及び2月の10日間ニホンジカ捕獲実施についての周知徹底連絡があった。

9・支部事務局担当者会議(高原)

1月21日(日)開催する。

10・日本山岳協会新年会(高原)

1月14日に開催される。会長、西村副会長が出席する。

11・会報『山』1月号編集報告(神長)

ルーム日誌 1月

6日	常務理事会
10日	総務委員会 図書委員会
山研委員会	高尾の森づくりの会
11日	理事会 集会委員会
12日	JAC-YOUTH 学生部
13日	山岳地理クラブ
16日	フォトビデオクラブ
17日	資料映像委員会
18日	ラブ 九五会
19日	二火会 00会
20日	ラブ スケッチク
21日	三水会 青年部
22日	科学委員会 指導委員会
23日	法人化PT 総務委員会
24日	支部事務局担当者会議
25日	の自然学研究会
26日	支部事務局担当者会議
27日	総務委員会 JAC-YOUTH
28日	UTH 海外委員会
29日	図書管理委員会
30日	自然保護委員会
31日	麗山会
スキークラブ	

26日 山の日制定PT ゆきわり会 高尾の森づくりの会
27日 山の日制定協議会
1月来室者468名

会員異動(1月)

物故

竹村元吉	(4916)	12・1・19
高木碯男	(5612)	12・1・16
國枝武喜	(5618)	11・12・31
小田孝	(9839)	11・12・30
菊島芳彦	(11457)	12・1・21
村上直温	(12607)	12・1・1

退会

本多勝一	(5766)	
林邦明	(8956)	
國生勇男	(9621)	
久保田守	(10068)	関西
原田征史	(10709)	
近藤隆弘	(11610)	関西
溝口緑	(11789)	山梨
望月直道	(12288)	岐阜
原田久江	(12599)	
牛島浄	(13184)	東京多摩
山野巧	(13450)	
内田稔	(13789)	
三浦たか子	(14047)	東海
河合弘	(14318)	関西

著 者	書 名	ページ / サイズ 発行元	刊行年 寄贈／購入別
中西俊明	山岳写真大全(山岳大全シリーズ No.5)	272P / 21cm 山と溪谷社	2011 出版社寄贈
木崎甲子郎	辺境の風景——木崎甲子郎画集	74p / 22cm 出版舎Mugen	2011 出版社寄贈
英国王立地理学協会 (編)	世界の探検大百科 ビジュアル版	360p / 31cm 東洋書林	2011 出版社寄贈
GAMO	山岳マンガ・小説・映画の系譜——「山」はいかに描かれてきたのか	237p / 21cm 山と溪谷社	2011 出版社寄贈
上田豊	未踏の南極ドームを探る—内陸雪原の13カ月/極地研ライブラリー	239p / 20cm 成山堂書店	2012 出版社寄贈
Alessandro Gogna	Le Alpi 360	/ 31cm Priuli & Verlucca	2010 中村保氏寄贈
John Harlin III (ed.)	American Alpine Journal 2011 (Iss.85, Vol.53)	400p / 23cm AAC Press	2011 発行者寄贈

ネパール映画『道端の花』

現代のネパール社会に根強く残るカースト制度による理不尽な身分差別。最下層出身のスレシュは、司祭階級の娘である恋人グランシュと、幼いころから愛を育んできた。しかし、ある大事件が発生し、身分違いの2人の愛に重くのしかかる。その現実を悲恋物語に描いた映画『道端の花』が上映される。ネパールの著名な歌手、エス・クマールの歌がネパールで大ヒットしたのを機に映画化されたもので、本人が主演となって2010年に制作された。2011年ネパールCGデジタル映画祭で、最高作品賞、優秀監督賞、脚本賞、優秀主演女優賞など各賞を獲得、クマールが詩情豊かに歌う歌声がスクリーンいっぱいに流れ、見るものの涙を誘う。大阪アジア映画祭、特別招待部門にも推薦された。上映時間137分。日本語スーパー字幕映画。一般2000円。

上映は、2月26日13時30分、川越市市民会館大ホールで。3月16日12時と18日18時50分から、大阪シネ・ヌーヴォで。

問合せは亜細亜フレンドシップ 電話かファックス 049-234-8070。



目録台本について
会報『山』751号から80号までの製本は、4月の目録発行以降に事務局で受付予定です。詳細は4月号でお知らせします。
事務局

I N F O R M

インフォメーション



◆第40回山岳史懇談会「現代山岳ガイド事情——ヒマラヤ、アルプス、そして日本」 図書委員会

現在の登山には山岳ガイドの存在が欠かせません。山岳ガイドの世界をトッププロ、中島政男、倉岡裕之各氏に、エピソードやお勧めポイントを織り交ぜて語ってもらいます。聞き手は、古野淳会員です。

期日 3月7日(水)19時より
会場 国際協力機構JICA研究所国際会議場(先着100名)

費用 500円(資料代)

申込 (☎) tosho@everest.jp または三好まき子 (TEL) 090-8019-8601

◆新緑と残雪の「信越トレイル」トレッキング 集委員会

「信越トレイル」第2回です。今は残雪の時期に斑尾山から鍋倉

山まで歩きます。現地集合・解散。現地までの交通費は別途個人負担。日時 5月27日(日)・29日(火) 行程 斑尾山→毛無山→黒岩山→仏ヶ峰→鍋倉山

集合・解散 別途案内

費用 2万5000円(宿泊、食事、送迎バスなど)

定員 20名

申込 4月20日までに、高橋 努 (TEL) 090-2906-4356 (FAX) 049-286-9296

(☎) tom-tak@bk9.so-net.ne.jp

◆新緑と石楠花の奥秩父主脈縦走 集委員会

奥秩父全山縦走の第2回は、雁坂峠から甲武信ヶ岳、金峰山へと

辿ります。現地集合・解散。現地までの交通費は別途個人負担。1日目は、小屋素泊り、共同食料(1キ)の荷揚げ分担当があります。

日時 6月2日(土)・5日(火)
集合 2日9時予定、塩山駅
解散 5日16時頃、荊崎駅
費用 3万円(宿泊費、現地交通費、雑費)

定員 15名

申込 4月30日までに植木淑美 (FAX) 042-734-1498

(☎) yoshimi-denali@com.home.ne.jp
*詳細はホームページに掲載。希望者には詳細案内を送ります。

◆『四国分水嶺』を発刊 四国支部

2月12日、四国支部が設立しました。これにともない、支部設立記念誌『四国分水嶺』(A5判、148頁)を発刊しました。購入希望者には実費1500円(送料390円)でお分けします。希望者は左記までご連絡ください。

申込 四国支部事務局長、小林

(TEL) 090-45504-7759

(☎) kyoko@mh.pikarane.jp

■訂正とお詫び

1月(800)号、22頁会員異動、退会の「秋田進」は「秋畑進」の誤りでした。訂正してお詫びします。

◆編集後記◆

●毎月、巻頭原稿には苦労させられます。多くの会員のみなさんに手にとってもらえるよう、考えているのですが、なかなかこれだという企画に思い当たりません。でも今月は、自信をもってお送りできそうです。多くの山の書籍を編集、ご自分の著書を何冊も出されている大森久雄さんに、読みごたえのある原稿をいただきました。●昨年9月に、イタリアの著名な登山家、ワルテル・ボナッティさんが亡くなって約半年になるうとしています。かつて来日した折りに、私も八甲田山に同行させてもらいました。とても気さくな方でした。イタリア在住の谷泰さんに、K2初登頂時の謎を、ちよつと長いのですが、寄稿してもらいました。(神長幹雄)

日本山岳会報 山 801号

2012年(平成24年)2月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社